<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>宮負定雄『民家要術』諸本の関係 宮負克己家所蔵「民家要術下巻」を中心に</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>小田 眞裕</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>書物・出版と社会変容 5: 79-103</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2008-11-10</td>
</tr>
<tr>
<td>種類</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
<tr>
<td>版</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10086/17070">http://hdl.handle.net/10086/17070</a></td>
</tr>
<tr>
<td>代号</td>
<td>作者</td>
</tr>
<tr>
<td>-----</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>A</td>
<td>諸本</td>
</tr>
<tr>
<td>天保2年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1831年</td>
<td>諸本</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>諸本</td>
</tr>
<tr>
<td>天保3年8月</td>
<td>諸本</td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>諸本</td>
</tr>
<tr>
<td>天保4年9月</td>
<td>諸本</td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>諸本</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【表1】民家要術-諸本の構成

### 民家要術-諸本

<table>
<thead>
<tr>
<th>代号</th>
<th>作者</th>
<th>内容</th>
<th>所属</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>諸本</td>
<td>民家要術</td>
<td>宮内庁保管</td>
</tr>
<tr>
<td>天保2年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天保3年8月</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天保4年9月</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 民家要術-諸本

<table>
<thead>
<tr>
<th>代号</th>
<th>作者</th>
<th>内容</th>
<th>所属</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>諸本</td>
<td>民家要術</td>
<td>宮内庁保管</td>
</tr>
<tr>
<td>天保2年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天保3年8月</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天保4年9月</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 民家要術-諸本

<table>
<thead>
<tr>
<th>代号</th>
<th>作者</th>
<th>内容</th>
<th>所属</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>諸本</td>
<td>民家要術</td>
<td>宮内庁保管</td>
</tr>
<tr>
<td>天保2年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天保3年8月</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天保4年9月</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>諸本</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
あった形になっているのである。また、草稿は、文政二年頃にはある程度まで読まれている。『民家要術』は、文政二年頃に著されたものを、『天保四年本』の前半部に収められたものである。草稿は、文政二年以降に作成されたもので、天保四年本の一部としてまとめられている。
年本・天保四年本（「定書」）の三者で異なっている点は、草稿本の成立が天保二年以前におなどとされるが、天保四年本では「天保四年本」として直し改定されたものである。草稿本の成立が天保二年以前というのとは言え、その時期に成立していることがわかる。

そこで、『民家要術』の一巻中で「民家要術」・「定書」・「学講」を比較検討した結果、草稿本の成立が天保二年以前であることが確認された。しかしながら、この時期に成立していることが見える。
天保二年本、天保四年本は、『農業の他に工職』「商務」に「山科」『農書』『農書』といった農民以外に関する項目を立てており、対象が百姓全般になっている。そのため、草稿本の『農民たる者』が天保二年本では「農商」に変化しているが、農民や商人が「農書」以外を前提にして読書である。
このページには、日本語の文が記載されています。
天保二年本にも、医者の読めるべき書と農民・商人の読むべき書を分けている点は共通するが、後者では、草稿本にみられた『傷寒論』・『金匱要略』について「医は医師である、これには違いない」と読むべき書を述べている。特に重視しているのが、水戸藩主・徳川斎昭が篤風と関わりをもって、定雄の著述を上書きしていたことである。

また、天保二年本では、それぞれの書物に説明を加え、定雄がどう考えたか、読みがどのように進むかを示している。

定雄は同書について、元禄期の『水戸大君（光圀のことを）』が侍医・徳川氏に命じて編集したという編集過程を説明し、「医学者のための文章を書く」という点から紹介している。
推奨される書物について、定義は内容とともに段階も考慮しているのである。

以上、草稿本における推奨書物について検討したが、

天保二年本「読書」の推奨書物を網羅したわけではない。

草稿本に書名を確認できないものの中、「論語」「孝經」は草稿本の「荻原聖人の書をも読みて、身を治む助とす」やこの記述に対応する。これを除くと、残るのは「玉鑛百首」、「玉鑛」である。

草稿本と天保二年本「読書」における推奨書物の明確な違いは、前者に本居宣長「玉鑛百首」、平田篤胤「玉鑛」の二説がある。前者の定義は、国学者による著述が入っている点である。定義は、文政初年頃に初めて「雲の真柱」を読んでから篤胤の説に通じている。これに対して、天保二年本「読書」では、読み方の項目では「吾師の玉鑛は真に道を磨く要の書にして読まざるは大辟の書」と、天保二年本の執筆時点では、吹雪側の出版事情も異なり、吹雪への持参から遠えるように述べている。草稿本は天保二年本の執筆時点では、吹雪側の出版事情も異なり、吹雪への持参から遠えるように述べている。草稿本は天保二年本の執筆時点では、吹雪側の出版事情も異なり、吹雪への持参から遠えるように述べている。草稿本は天保二年本の執筆時点では、吹雪側の出版事情も異なり、吹雪への持参から遠えるように述べている。草稿本は天保二年本の執筆時点では、吹雪側の出版事情も異なり、吹雪への持参から遠えるように述べている。草稿本は天保二年本の執筆時点では、吹雪側の出版事情も異なり、吹雪への持参から遠えるように述べている。
三 天保四年本《読書》

天保四年本《讀書》の詳細な検討は別稿を避けたいが、草稿本の位置づけに関する範囲内で、若干の検討を加えていく。

天保四年本は、天保三年本と同様に二五の項目からなっていた「家家書」だが、「気磨舍日記」からは天保二一八三年まで同書を手ほどきした模様が見えない。農業調査・草木模様群を含む「気磨舎日記」の出版後は出版を意図して執筆したと考えられる。自序が付された天保四年末の自序本は、より出版に近い状態といえるが、語句の揮ひや空欄も残っており、完成稿ではない。

また、天保四年本には下巻巻末に、先述した箋風・鎌約の風が見られる。

田園学に基づく教論という方向性が明確になったとみる

野村の観点を収録されている。旧道義家御廣依との

村方改革政策の主導下、文政末年に定雄や同村の気磨舎門人たちが主導した政事改革の内容が記され、差出の欄には定

雄という印象が押されている。この覚書は、天保四年末の

の二五箇条目である『村長』の未末から自筆を半分分

けた次の丁の右端から記されており、『村長』の末尾に整

いた文章である。故に、出版が確定されていなかった自序

から『村長』までの部分と考えられる。

天保四年本は、猿松という名の猿に対して、各項目ご

とに神の使いが様々な姿で立ち現れた教訓を述べるとい

う。場面の形式・論が進む。天保四年本全般の性格に

ついて、小野野氏は、天保四年本が天保二年本から大幅

内容の改変と増補を伴っていたことにより、『村長』を似けた小説家その「しろうこ」の体裁を強調意識したと指摘した。}

これらは、文政（天保年間に刊行されている『読書』内）

天保四年本では『村長』の項で、最近何か著述が出る

94
といった嘘がある」顔松に対し、案山子の相平田国学
でいう久延屋古神が「顔松が妙々奇談を小説で
屋大人の「しろうこと」などの手際を描る顔松の仕組
いう記事がある。この五湖二十五条目には、三日前、宮
負佐平書状を、二つの詰め物に、気吹をし、風吹き
の詩を詠むとある。「妙々奇談」には、南郷の画家宋
民石（正徳五一年正月二十一日生まれ）の名前
の雪渓の「顔松の詩」を読み解き、読者に示す。
の雪渓が「妙々奇談」を読んだとも確認できないが、以
上の点を指摘しておかなければならない。も
言うことには、平田顔松が詠んだ弘法大師の
二つの詰め物に、気吹の詩を唱え、風吹き
の詩を詠むとある。「妙々奇談」には、南郷の画家宋
民石（正徳五一年正月二十一日生まれ）の名前
の雪渓の「顔松の詩」を読み解き、読者に示す。
の雪渓が「妙々奇談」を読んだとも確認できないが、以
上の点を指摘しておかなければならない。も
言うことには、平田顔松が詠んだ弘法大師の
二つの詰め物に、気吹の詩を唱え、風吹き
の詩を詠むとある。「妙々奇談」には、南郷の画家宋
民石（正徳五一年正月二十一日生まれ）の名前
の雪渓の「顔松の詩」を読み解き、読者に示す。
【表2】天保4年本『民家要術』「諸家書く書中のの必むべき書道もの目録」

<table>
<thead>
<tr>
<th>作者名</th>
<th>書名</th>
<th>種類</th>
<th>類別</th>
<th>産物名</th>
<th>备考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
</tr>
<tr>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
</tr>
<tr>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
<td>本朝</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料: 天保4年本『民家要術』
村役人が読む稿を村役人が教訓することが想定され
ていった。読み聞かせの素材に適当として推奨していた孝
子伝・烈女伝が天保四年本でありがていることから、
村役人による読み聞かせという方法を定型化したとい
な。書物購入上の視点は、『神経講』での使用を主眼と
していたものから出版を想定した書物に『民家要術』の
性格が変化し、対象とする読者も変わった事実と関連し
ていると考えられる。

史料三の引用部分に続き、天保四年本でも撰者の
霊に対して敬意が深いことは、推奨文書を国書に限定し
たことに対応し、例が孔子から変解に変解されている。
天保四年本は、『序説』という仮解批判の項目が加わった
ように、天保四年本よりも儒道・仏道との差異化が図ら
れており、平田国学に基づく教訓という方向性が一層明
確になっているのである。ただ、天保四年本における
変化は儒労や気吹きやの影響のみで論じられるもので
はない。なおには有見の書物情報のよう伝 Healで知る
度の内容もある。変化的質と背景を詳細に分析してい
く作業が求められる。

天保四年本で新たに追加された内容のうち、筆者は別
稿で、『教訓下手談義』の影響に注目した。『教訓下手談
義』(金広二)、『講話手談義』(金広三)、『講話手談
義』(金広三)、『講話手談義』(金広四)、『講話手談義』(金広五)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け、『講話手談義』(金広二)
書正義本及の影響を論じた。天保四手本書の推奨書物は、宗
手談義の影響を著しく受け。
天保二年本『読書』では、定雄が「家訓」から大部の引用を行ったと指摘。定雄は、人々が『家訓』を通じて様々な書物の内容に接することを目指していたと考えられる。つまり、『家訓』は諸書の抜粋としての側面をもっていたのである。定雄が『家訓』を重視して理解できる理由は、定雄が自身が益軒本から知識を得た本をどのように捉え、共通の説を総合してどのように受容したか、今後検討すべき課題である。

本稿では、定雄が「家訓」を通じて様々な書物の内容に接することを目指していたと考えられる。つまり、『家訓』は諸書の抜粋としての側面をもっていたのである。定雄が『家訓』を重視して理解できる理由は、定雄が自身が益軒本から知識を得た本をどのように捉え、共通の説を総合してどのように受容したか、今後検討すべき課題である。

本稿では、先行研究が拠点にてきた天保二年本以前の成立と考えられる草稿を中心に、『家訓』などの書物への視点から理解できる。
学説論。参加者に読み聞かせることを主眼として著された同書だが、天保初年に当たる気吹合からの出版が目立つようになるが、平田国学に基づく教訓という方向性が徐々に明確化し、対象とする読者層も広がっていった。本稿では、その影響が農業等どの分野や書物情報・具体例といった質にまで及び、定雄の考えを気吹合を通じて得た知識や情報が、自身の関心に基づいて「平田国学」に取り入れられた。地方人への活動に気吹合が与えた影響を、国学の形成過程に明かにしている。

次に、本稿で草稿本を取り上げたことの意義について述べる。天保四年を分析した小野将氏は、天保初年ににおける定雄の考えが「平田国学」の構想に密着されたものと指摘し、その内容が実質的には農家にとっての心得、教訓・人生訓に近いが、平田学特有の思想が隠されている。この思想は、近世の民衆思想の主潮流といえる知足

分論・職務奉公論がみられるが、それらを祭議論や神論、神論と結びつける、社会秩序の全体像を展開している。天保国学の特質が明らかにされている。本稿では、安居優秀な、文政二・三の確立論に至るまでの過程を示す。
は諸本を通じて「民家」のためという観点が貫いている。「民家要籍」の変化は、定雄における「民家学」の形成・変容過程を示しているのである。また本稿では、草稿本において村役人に推奨する書物に国学者の著述が入っていない点を指摘した。定雄が草稿本で推奨した書物からは、国学門人としての特徴を指摘している。ただし、定雄が「民家要籍」を平田国学に基づく松沢村での「政事改革」で用いていた点に留意する必要がある。定雄は、これらの書物の内容が平田国学の説と矛盾しないと考えていたのである。

筆者は、平田国学を地域に展開していく様な思想潮流を踏まえ、定雄が推奨した書物を注目した。そこで注目したいのが、東条地域を連絡していた筆者流が、当地の気候関係から、気候学的な書物が準備されている点である。地域のいわゆる国学受容層に、地域における平田国学研究者層が準備した可能性を図ることができ、地方国学研究に、代表的である。
新修田篤胤全集第六
名著出版一九七七年
小野前掲註二
吉川弘文館一九七七年
前掲註8同
前掲註10同
前掲註8同
前掲註10同

五十一岩波書店一九七一年

付記
史料閲覧に際して、義家東陽下巻の所蔵者である宮

松本三介「幕末日本学の思想史的意義」「日本思想大系」